



Title	EMPIRICAL STUDIES ON SOCIAL DETERMINANTS OF HEALTH AND WELL-BEING
Author(s)	松島, みどり
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/52219">https://hdl.handle.net/11094/52219</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a>〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論 文 内 容 の 要 旨

氏 名 ( 松 島 み ど り )

論文題名

EMPIRICAL STUDIES ON SOCIAL DETERMINANTS OF HEALTH  
AND WELL-BEING  
(健康と厚生の社会的決定要因に関する実証分析)

論文内容の要旨

This thesis aims to uncover the social determinants of several important health and well-being issues. It consists of three chapters, and each chapter looks at how socioeconomic, sociopolitical, and societal norms and values influence health and well-being. The results of each chapter, as summarised below, indicate the significance of socioeconomic, sociopolitical, and societal norms and values defining people's health and well-being.

Chapter 1 examines the effect of parental employment status, which is largely affected by macro socioeconomic condition, on infant health by using the provincial panel data of Japan from 1975 to 2010 with five-year intervals. For the past 35 years, Japan has experienced both economic booms and recessions, and labour market demand has been changing in response to the economic situation throughout these periods. In particular, there was a large increase in the unemployment rate during the recession (late 1980 to 2000), and a rapid increase in younger contingent workers since 2000. This chapter exploits these variations in unemployment rates and contingent employment of the parental generation across and within prefectures over time, and estimates the impact of unemployment on the weight of babies. The results lead us to conclude that parental unemployment and contingent employment negatively affect infant health.

Chapter 2 explores how bribery in the health sector is associated with people's well-being as well as universal health coverage. Practice of bribery is indeed shaped by wider political forces so that many countries, developing and emerging countries in particular, suffer from its negative consequences. By using the data of Vietnam from 2011 and 2012, this study reveals a negative correlation between the prevalence of bribery and health outcomes and the health insurance enrolment rate. Additionally, the results indicate that bribers feel neither cured of injury/disease nor satisfied with health care service quality. Furthermore, when people believe that they must bribe health workers in hospitals, they are less likely to enrol in the health insurance scheme.

Chapter 3 considers how societal norms and values relate to the health behaviour and well-being of people with reference to adolescent childbearing behaviour. Empirical estimation using the data of Nicaragua in 1998 and 2001, where a machismo culture – men dominate women's lives publicly and privately, and having numerous children with different women is praised as a sign of virility – is prevalent, show that the lower the level of autonomy and status of women in the community, the greater the increase in the risk of adolescent childbearing and teenage sexual activity. Notably, the influence of societal and cultural norms becomes stronger for the risky behaviour including sexual debut and marriage at the age of 15 to 16 in comparison with 17 to 18.

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 松島 みどり )			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教 授	山内 直人
	副 査	准教授	山田 浩之
	副 査	准教授	小原 美紀
	副 査	教 授	赤井 伸郎

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、人々の健康と厚生のための社会的決定要因について実証的に研究したものであり、社会経済的要因、社会政治的要因、社会通念・文化的要因が健康や厚生にどのように影響を与えているかを3章構成で分析している。

第1章は、親の就業状態が新生児の健康状態にどのような影響を与えているかを日本の県別パネルデータ（1975年-2010年の5年おきのデータ）を用いて分析している。分析では、県別、年別の親世代の雇用状況の違いを捉え、それらが新生児の健康にどのように影響を与えているかを検証した。その結果、親の失業や非正規就労は、新生児の健康に悪影響を及ぼすことが示された。これは、日本のように出産への環境が整った国でさえも、労働需要に大きく左右される親世代の失業や非正規就労が幼児の健康状態に影響することを示しており、また、親世代の格差が子世代に継承される可能性を示唆している。近年の若年の失業や非正規就労は、本人の厚生の問題であるだけでなく、より長期的で社会的に負の影響をもつ可能性があることを示しており、公共政策にも重要な示唆を与えられよう。

第2章は、医療機関での賄賂と人々の厚生との関係を分析したものである。医療機関での賄賂は、より広い意味での社会政治的な要因によって規定されており、多くの開発途上国および新興国で問題となっている。本章では、ベトナムの2011、2012年のデータを用いて、県別の賄賂の横行と住民の健康状態、及び個人々の病院での賄賂の支払いと患者の満足度の関係について分析した。加えて、ベトナムは国民皆保険の達成目標に反して加入率が伸び悩んでいることから、医療機関での賄賂の必要性和健康保険の加入の関係を、県レベルと個人レベルで分析した。分析の結果、賄賂と人々の厚生、賄賂の必要性和国民保険の加入について、負の関係が確認された。この分析結果は、健康政策を考える上で政治環境も考慮に入れる必要があることを示しており、現在、国民皆保険の導入を考えている国々に対しても重要な政策的示唆を与えられよう。

第3章では、社会通念・文化的要因が人々の厚生や健康行動にどのように影響しているかを分析している。具体的には、ニカラグアの1998年と2001年のデータを用いて、男性優位主義-男盛りで性的に活動的な男性が褒め称えられる風潮-に影響される女性のオートノミー（自立）や女性の地位が若年出産とどのように関係しているかを検証した。分析では、20歳以上の既婚女性で家庭内意思決定に関わることができるかを女性のオートノミー変数とし、意思決定に関わることのできる女性の割合を市単位で算出している。また、女性の地位（女性の教育歴、初婚年齢、夫との年齢差で測定）についても市平均を算出し、これらを20歳未満の女性の居住地域のオートノミー変数および女性の地位変数とした。分析の結果、居住地域女性のオートノミーや地位が高い地域では若年出産のリスクが低くなることが分かった。加えて、これらの影響は若年であればあるほど顕著であった。この結果は、居住地域の文化や社会通念といったものが、人々の厚生・健康行動に影響を与えることを明らかにした点で重要である。

本論文を通して、社会経済的要因、社会政治的要因、社会通念・文化的要因は、人々の健康や厚生のための重要な決定要因であることが明らかとなった。個人には健康を守る権利が与えられていること（Health rights）、健康は資本であり生産活動に不可欠であることなどを鑑みると、人々の健康状態を良好に保つことは公共政策の重要な目標であり、本論文は学術的貢献のみでなく、科学的な政策デザインのためのevidenceの提供という意味でも貢献が期待される。

以上のとおり、本論文は、健康・厚生のための社会的決定要因について実証分析を行った興味深い研究論文で、この分野の先行研究を十分消化したうえで、適切かつ高度な計量経済分析によって信頼できる結果を得ており、この分野の研究に新たな知見を加え、重要な学術的貢献をしているものと評価することができる。よって、審査委員会は一致して、この学位請求論文が、博士（国際公共政策）の学位を授与するに十分値するものであると判断する。